

特別支援学級 総合的な学習の時間学習指導案

地域との関わりを通して共に学び合い高め合う児童の育成

～地域の特色を生かした相っ子学習の充実～

町田市立相原小学校

みどり学級 18名

指導者 T1 鈴木 創大

T2 岩原 敦浩

T3 石倉 聰乃

T4 犬塚 順子

T5 比留間 未央

1 単元名 みどり学級 販売所をひらこう

2 単元の目標

地域の人、もの、ことに関わる探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付けるとともに、地域の特徴やよさに気付き、それらが人々の努力や工夫によって支えられていることに気付く。

自分の役割や責任を果たし、役立つ喜びを体得することができる。(高学年)

友達と協力して活動する中で、かかわりを深めることができる。(中学年)

3 評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力
他教科で身に付けた知識や技能を調べる活動や表現活動に生かそうとする。	いくつかの課題の中から自分のやってみたいことや調べたいことを選ぶ。自分の課題をいつも意識しながら、自分の考えた方法で体験的な活動や調べる活動にねばり強く取り組む。	学習対象に関わることの楽しさに気付き、進んで関わろうとする。自分のよさに気付き、学んだことを自分の生活に生かそうとする。

4 身に付けさせたいキャリア能力

人間関係形成・社会形成能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
多様な他者の考え方や立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考え方を正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力。	仕事をするまでの様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力。	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置づけ、多様な生き方に關する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力。

4 単元について

(1)児童観

本学級は、軽度の知的障害特別支援学級である。個々に課題はあるが、概ね基本的な生活習慣が確立している。適切なコミュニケーションをとろうとしたり、指示にそって行動しようとしたりするなど、集団生活の中での自己の力を発揮して学校生活を送っている。

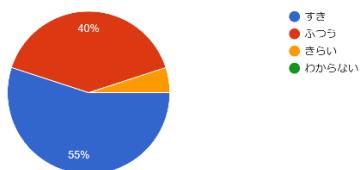
本研究の授業を行うにあたり、3～6年生に事前アンケートを実施した。アンケート結果から、「総合の学習がすきですか」という質問に対して、「すき」「ふつう」は17人で全体の95%。一方「きらい」と答えた児童は1人で、理由は「意見をまとめるのが苦手だから」。

「話し合い活動はすきですか」という質問に対して、「すき」「ふつう」は14人で全体の80%、「きらい」は4人で全体の20%となった。理由としては「むずかしい」「関係のない意見を言う人がいる」などが挙がった。

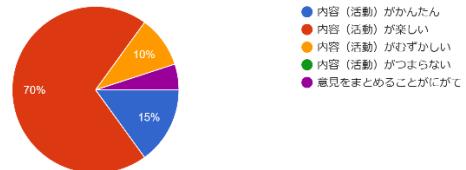
アンケート結果から、総合の学習は好きだが、話し合い活動はふつう・きらいという児童が6人。みんなで何かを作ったり活動したりすることは好きだが、話し合うことに対する抵抗感や、自分の意見を伝えることの難しさを感じている児童が多いと考察される。

みどり学級のこれまでの授業で、自分たちで課題を見つけたり、解決方法を話し合ったりする問題解決型の学習に取り組んだ経験が少なく、児童も自分たちで考え進めることに慣れていない。今年度は、総合の授業だけではなく、学級活動を通して、自分たちで議題を見い出し、話し合い学習を進めている。

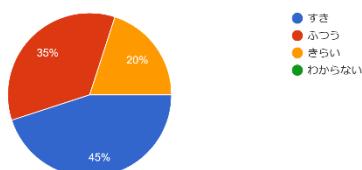
①総合の学習はすきですか？
20件の回答



②どうして そう思いますか？
20件の回答



③話し合い活動はすきですか？
20件の回答



④どうして そう思いますか？
20件の回答



(2)教材観

4月、児童に「総合の学習でやりたいことはあるか」と尋ねたところ、「野菜を育てたい」という意見が出た。例年みどり学級は、学級の畑で野菜を育て収穫し調理して食べていることから、野菜作りを身近に感じており、楽しい学習活動であることを認識している。よって、今年度も「育てた野菜を収穫・調理して食べよう」という学習問題が提案された。

本単元では、農業に携わる身近な人々（里山の会）との出会いをきっかけに、野菜を育てたり、育てた野菜を販売したりしていく。児童に育てた野菜を販売することを終着点として意識させることで、学級の児童全員が同じ目標に向かって活動することができると共に、課題意識をもって学習に取り組む姿勢が期待できる。野菜を育てる活動や販売をする活動の中で児童は、いくつかの問題に直面すると考える。その課題をいかに解決していくかを自ら考え、考えたことを友達と共有する活動を積極的に取り入れることで、自分の考えに自信をもったり、積極的に伝えようとする気持ちを育んだりすることができる。また、友達の発言を真剣に聞いたり認めたりする姿が期待できる。

(3) 指導観

学習に連続性があることや教材を身边に感じさせるため、一昨年本校で制作された「相原子どもかるた」を学習の導入で行い、地域の特徴や地域で育てられている作物・農業や人に気付かせる。さらに、かるたを行う中で、知らない事象を出し合い、それを調べるための地域探検を行う。かるたで知った「無人販売所」を、実際に見学することで、野菜作りに対して興味を抱かせると共に、「自分達も育てたい」という気持ちを高める。さらに「無人販売」から、育てた野菜を販売したいという気持ちを高めたい。

野菜作りから販売までの流れは、全部で2回行う。1回目は、学級全員が一丸となって協力しながら育てるという気持ちを育むため、個人やグループで考えたことを学級全体へと広げ、方向性を決めた上で学習を進める。しかし、全員で進めることで、友達の発言や活動を認める姿が望める一方、活動を友達に任せたり、なんとなく活動をして終わったりするような児童が出てくる心配もある。

児童が教材への切実感を抱き、主体的に活動する気持ちを高めるために、2回目の野菜作りで、より充実したものにするための理由についてじっくり考えさせる。児童からは、畑や野菜に対する思い入れが薄れていたことや、野菜作りに関する知識が不足していたこと、自分たちだけで進めることには限界があり、地域の方に教わらなければならないことなどの反省が出ると予想される。特に、野菜に対する思い入れが薄れていたこと、野菜作りに関する知識が不足していたことと、2回目の販売を行うことに着目させ、個人に課題意識や切実感をもたせたい。本時の学習をきっかけに、2回目の栽培と販売では、児童が課題を自分事としてとらえ、主体的に野菜の育て方を調べたり、販売についての意見交換をしたりする姿となることを期待する。

5 校内研究との関わり

(1) みどり学級が考える学び

相っ子学習における「人」とは、自分、学習に携わる地域の方(VC・里山の会・PTA)であり、「もの」とは、野菜であり、「こと」は、販売・収穫祭である。「野菜」を教材に、多くの「人」と関わる中で、「もの」野菜への興味・親しみを抱き、「人」や「もの」への感謝、野菜作りや学習の工夫の仕方を学び、「こと」販売・収穫祭を通して学んだことを、お世話になった「人」・これから学習していく「人」に伝えていく。

栽培から販売までの活動は2サイクル行う。販売に向けてアイデアを出し合ったり、販売後に販売の仕方や販売に至るまでの栽培の仕方を振り返ったりする。ここでは、友達の発言に同意するだけでなく、疑問をもったり対立したりする場面が多く生まれ、学習が深まつたりより良くしていこうとする気持ちを育んだりすることができる。これらの活動を繰り返すことで、児童のやりたいことやなりたい自分に向かって主体的に取り組もうとする姿勢や、他者と意見が分かれた時にうまく折り合いをつけるなどの姿が期待できる。

学級全体を一つの商店に見立て、担任の人数に合わせグループを5つ設定。担任を含む小集団が連携して活動内容や作業分担などを相談し、学習を進めていく。この学習スタイルでは、個々の作業力に応じた学習内容を設定することが可能。また、自分の役割をこなすことで、人の役に立っている気持ちを持ちやすい。さらに、相手を意識しながら協働することで、あいさつ・マナー等の実際の社会生活場面でも必要な事柄を習得できると考える。よって、児童一人ひとりが自らの役割をこなし、協働しながら学習活動を進めるようにし、他者との関係を意識して働くことを学ばせ、働くことに対して意欲を持たせたい。

(2) 本単元における共に学び合い高め合う姿

児童が切実感をもって、主体的に野菜の育て方を調べたり、販売についての意見交換をしたりする姿。

(3) 研究主題に迫る具体的な手立て

① 単元・授業構成の工夫

これから地域産業の後継者を育てる学習として、野菜を育てる（先を見通して、計画的に進めないと失敗する）を通して、農産物を育てるもののすばらしさや農業の良さを考える機会とするだけでなく、作った農産物を販売したり、みんなで料理して食べたりという活動を展開する。

② 異年齢小集団活動

高学年は常に全体をよく見て班員をリードしながら動き、中学年は高学年を助け、低学年は自分でできることをしっかりと行い、それぞれが相手を意識して協力し合いながら成長していくことをねらって異年齢小集団活動を行う。

③ 5担任による少人数指導

異年齢小集団による話し合い活動を円滑に行い、話し合いを価値的に進めるために、各グループに担任が入り話し合い活動の支援を行う。

単元の指導計画(全35時間扱い)

1次	目標	○主な学習活動
1	育ててみたい野菜について話し合い、昨年畑で育てたことを思い起こして、野菜を育てる時期や場所に気付き、野菜を育てる計画を立てることができるようになる。	みどり農園で野菜を作ろう ○学校の畑の使い方を話し合い、自分達で栽培する野菜を決める。 ・トマト・なす ・きゅうり・ピーマン
2	植物を育てた経験を生かして、育てる野菜と育てた野菜をどうするか計画を立て、野菜にあった世話の仕方があることに気付き、おいしい野菜を育てたいという願いをもつことができるようになる。	畑の作り方を調べよう(4/23) ○畑の作り方を教えてくれる畠名人(里山の会)を校長先生にお願いして紹介してもらう。 ○苗の植え方を里山の会の皆さんに教えてもらう。
3 ・ 4	世話の仕方を調べたり、詳しい人に聞いたりして、適切な方法で苗を植え、大切に育てることができるようになる。	苗を植えよう(5/7) ○畠名人(里山の会)といっしょに畑を作り、苗を植える。
5	世話の仕方を調べたり、詳しい人に聞いたりして、支柱立てや追肥などの適切な世話をし、野菜の成長や変化に関心をもって観察したり世話をしたりできるようになる。	世話をしよう(6~7月) ○植えた野菜の世話の仕方を本で調べたり、インタビューしたりし、必要な当番を決める。
6	野菜の結実とこれまでの自分の世話を関連付けて捉え、野菜にも生命があることに気付き、継続して育てた自分への自信をもつことができるようになる。	収穫しよう。 ○熟した野菜を収穫する。
7 ・ 8	I学期の内容をもとにお世話になったひと・ことを振り返り、礼儀・マナーを考えながら手紙を作成する。	○手紙の担当を決める。 ○手紙に書く内容を話し合う。 ○手紙を書く。

9	作成した手紙を感謝の気持ちをもって渡すことができるようとする。	○お礼の言葉とともに手紙を渡す。
10	夏野菜の終わり方を話し合い、学習の見通しをもつ。	○次の活動に向けて畑をどうするか話し合う。

目標	主な学習活動
夏野菜の終わり方を話し合い、学習の見通しをもつ。	○畑をどうするのかを話し合う。(1時間目) ○無人販売所で野菜を販売した経験を生かして、今後の畑の使い方を考える。(1時間目) ○育てた野菜をどうするのかを話し合う。(2時間目)
I 学期の学習を振り返り、課題を見つける。	○I 学期の学習を振り返る。(3時間目) ○なぜ赤字になってしまったのか(課題点)をグループで話し合い、クラゲチャートを作成する。(3時間目) ○課題を全体に共有する。(3時間目)
課題解決方法を考える。	○課題について、その原因をグループで考える。(4時間目) ○グループの意見を共有する。(4時間目) ○課題について具体的に原因を話し合う。(5時間目) ○グループの意見を共有する。(5時間目) ○課題に優先順位をつける。クラゲチャートを優先順位で並び替える。(5時間目) ○課題の解決方法を考える。(6時間目)
必要な情報を集める。	○情報機器や本などを活用してグループで考えた解決策の具体的な案を収集して、クラゲチャートにまとめる。(7時間目) ○全体で共有する。(8時間目)
集めた情報を整理・分析する。	○具体的な案を実行するために、何が必要かクラゲチャートに整理し分析する。(9時間目) ○グループで考えた案を共有する。(10時間目)
より良い売り物(野菜)を育てるために考えたことを実践するために、ステップチャートを作成する。	○前時で整理した内容を確認する。(11時間目) ○学習内容をもとに、野菜を育てるまでのステップチャートを作成する。(11時間目)
ステップチャートに基づいて活動する。 野菜を育て始める。	○野菜の育て方を調べる。 ○野菜の育て方を里山の会の皆様から教えてもらう。 ○野菜を育て始める。
宣伝の工夫を考え、実践する。	○どうしたらお客様に販売所を知ってもらえるのかを考える。 ○宣伝の工夫を考え実践する。
値段を設定する。	○スーパーや無人販売所の値段設定を調べる。 ○苗の仕入れ値やスーパーの価格をもとに、売り物の値段を設定する。

12 月	販売の方法を考える。	○無人販売所と有人販売所どちらで品物を売るのかを考える。 ○販売所の場所を考える。
12 月	野菜を収穫し、販売する。	○野菜を収穫し、袋詰めする。 ○販売所を設置し、販売する。

7 本時の指導

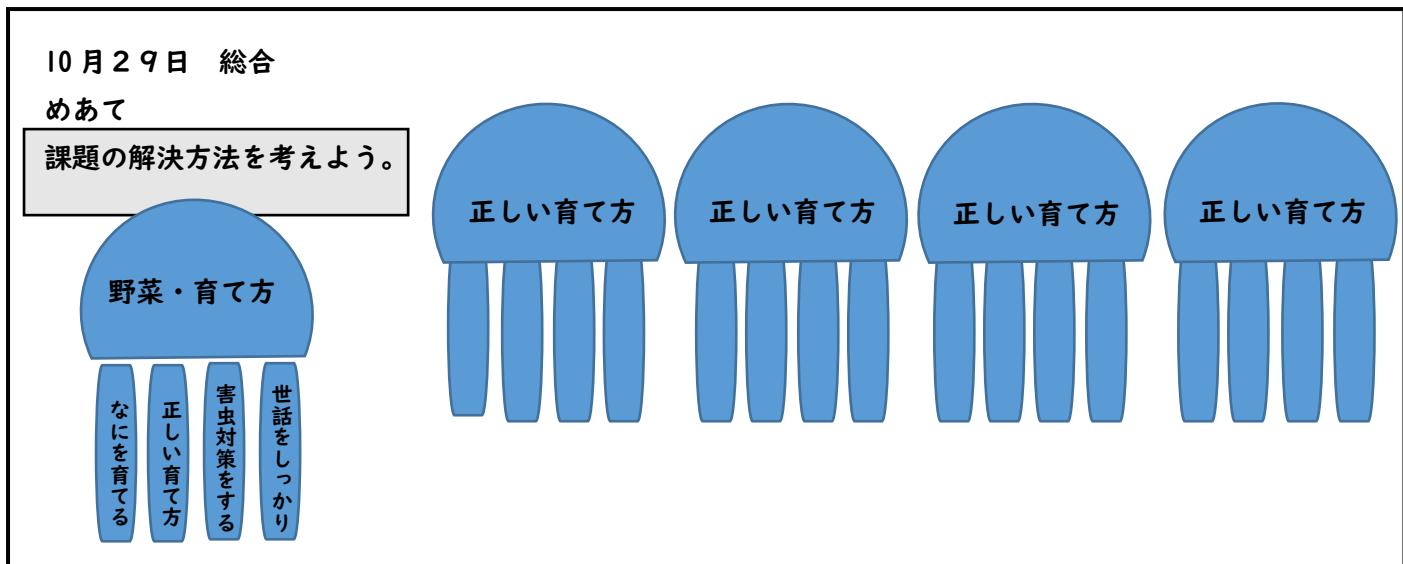
(1) 目標

グループで協力して、課題の解決方法を考える。

(2) 展開

過程	○学習活動・T:教師 C:児童	●留意事項・◇評価
導入	○前時の学習を振り返る。(5分) T:前回の学習では、何をしましたか。 C:クラゲの順番を決めた。クラゲに順番を付けた。	●前時に作成したクラゲチャートを確認し、課題を明確にする。
	めあて 課題の解決方法を考えよう	
展開	・前時に作成したクラゲチャートの足と頭を入れ替えて、課題への解決方法を考える。 ○グループで課題の解決方法を出し合う。(20分) ・4つのグループがそれぞれの活動場所に移動する。 ○グループの意見を共有する。(15分) ○次時への見通しをもつ。	●意欲的に学習に参加できるように、司会担当・書記担当・貼り付け担当・発表担当に役割を分担する。 ●みどり1組、2組、3組に分かれて、各グループが活発に活動に取り組めるような環境を整備する。 ●児童同士が積極的に協力し合えるように、異年齢を意識したグループで活動に取り組む。 ◇ 正しい野菜の育て方を知るためにどのような手段があるのかを考えることができる。【課題対応能力・発言】
まとめ	○活動の振り返りをする。(5分)	

(3) 板書計画



(4) 協議会の視点

- ① 野菜を育てたり、売ったりする活動を計画するなかで、児童自身で相原の良さや特徴に気が付いていたか。
- ② 異年齢集団による小集団の話し合い活動は、児童が積極的に学習に参加するための手立てとして有効であったか。

<成果>

地域と野菜を教材に年間を通して学習してきたことにより、二次からの学習を教師も児童も進めやすかった。試行錯誤を繰り返して学習を進めるので、学習活動の見通しがもちやすく、常により良くしようとする意識の高まりと技能の習得が期待できた。畑作りや野菜の販売を通して、地域の人と関わることができ、児童自身が相原の良さや特徴に気付くことができた。総合的な学習の時間以外でも異年齢集団による話し合い活動を取り入れたことで、話し合い活動に積極的に参加する児童が増えた。また、話し合い学習で話型指導を徹底したことにより、他教科での話し合いや学習でも自発的に話型で話す児童が増えた。中・高学年が話型で話すことにより、低学年も自然と真似して話型が身に付く傾向がみられた。

アンケート結果からは、総合の授業が嫌いという児童が0になり、好きという児童が増えたこと、話し合い活動が嫌いな児童が減り、好きな児童が増えたことも成果としてあげられる。理由として、話し合いが難しいと感じていた児童が減り、話し合いを簡単だと感じる児童が増えたことから、話し合いのスキルが上達したことと、それにより自信が身に付いていくていることが考えられる。

<課題>

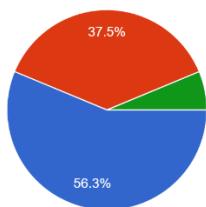
試行錯誤しながら取り組む中で、二次の導入で畑の雑草取りや水やりなど、体を動かす活動になると「暑い」「世話が面倒くさい」「虫がいる」「手が汚れるのがいや」など意欲が低下する児童が2割弱あり、農業における苦労を乗り越えさせるための手立てが不十分であったことがわかった。「収穫祭として、みんなで調理するのは楽しいよ。」「調理して食べないの？」など、収穫祭で気を引く形で全員取り組めるようになったが、他の声掛けなどは無かった課題が残る。

赤字を黒字にするために、より質の良い野菜を育てたり、販売数を増やしたりすることが必要であるという意識を、児童にもたせるための展開であったが、低学年・中学年には少し難しかったように思う。児童から、「もっと売りたい！そのためには品質の良い野菜をつくりたい！」という言葉ができるような学習展開を模索できたら良い。

アンケートからわかる課題としては、総合の学習内容がつまらないという児童が増えたことから、つまらなさを改善していく必要性がある。また、どこにつまらなさを感じたのか、詳細がわからないので、改善していくためにも、つまらなさを感じる点を明確にし、手立てを講じたい。

①総合の学習は好きですか？

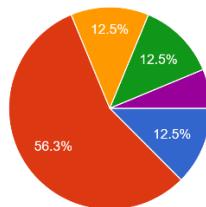
16件の回答



②どうして そう思いますか？

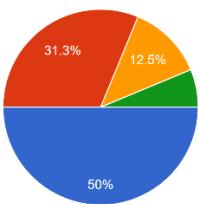
16件の回答

- 好き
- ふつう
- どちら
- わからない



③話し合い活動は好きですか？

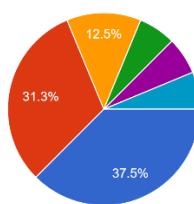
16件の回答



④どうして そう思いますか？

16件の回答

- 好き
- ふつう
- どちら
- わからない



- 内容(活動)がかんたん
- 内容(活動)が楽しい
- 内容(活動)がむずかしい
- 内容(活動)がつまらない
- どちら

- 結構大変そう
- 出された意見とかんけいの意見を言う子が多いから